

## 平成 25 年度みんぱく若手研究者奨励セミナー:「アート」を考えるー人類学からのアプローチ

### 発表要旨

緒方しらべ

総合研究大学院大学博士課程

### アフリカ美術とつくり手の実践ーナイジェリア地方都市の「アーティスト」の事例から

本発表は、アフリカの地方都市で「アーティスト」として暮らすつくり手と作品について、美術市場と地域における「アート」の需要、そしてつくり手の自己実現のありかたに着目して考察することにより、西洋近代に特有である美術の制度や言説に回収されるだけではない「アート」の可能性を検討する。

これまでの人類学や美術史学におけるアートの研究は、普遍的芸術としての西洋美術の絶対視を問い、非西洋社会において造形がつけられる状況や技術、造形の象徴的意味や機能を明らかにしてきた。また、博物館や美術館という展示の場における西洋と非西洋の力関係を明らかにし、それを乗り越えようとする展示の試みもなされてきた。しかし、すでに 25 年まえに、西洋近代の支配の枠組みとしてのアートという制度がジェームズ・クリフォードによって指摘されているにもかかわらず (Clifford 1988)、不均衡な力関係や制度と関わりながら非西洋の人びとが「アート」をつくり、「アーティスト」として生きることの困難や矛盾、創意や工夫が明らかにされることはほとんどなかった。

ジョン・ピクトンは、アフリカ美術が欧米のキュレーターや美術史家の価値・判断のもとに選ばれ、分類され、展示されてきたことを批判的に検証したうえで、アフリカ各地域における「アート」の評価や批判、需要に目を向け、いかなる状況において、誰によって、どのように造形が「アート」として認識されているのかを明らかにすることの重要性を指摘している (Picton 1992; 1994; 1999)。古谷嘉章は、西洋近代の芸術界が容易に消化できない差異に着目することで、その差異が芸術をめぐる近代以来の支配的な言説をつくりかえてゆく挑戦となりうるか否かという方向に考察を進める議論をおこなっている (古谷 1998)。本発表はこのような視座に立ち、まず、自らの手で造形をつくり、それによって生活しているつくり手にフォーカスをあてる。そして、アフリカの地方都市において、つくり手が「アート」と呼ぶものが存在し、それが認識・享受されている現場から、「アート」について検討していく。

事例としてとりあげるコラウォレ・オラインカは、ナイジェリア連邦共和国南西部の地方都市イレ・イフェで暮らす「アーティスト」である。生計や成功、自己実現のためにさまざまな「アート」をつくるオラインカの暮らしと作品には、イレ・イフェ、および、ナイジェリアの「アート」をめぐる状況と特徴も表れている。本発表は、多様なスタイルと媒体による絵画、彫刻、陶芸、グラフィック・デザイン、テキスタイル・デザインといったオラインカの作品の背景にある、ヨーロッパとイレ・イフェにおけるアートまたは「アート」の需要、さらには「アート」に対するつくり手自身の欲求や選択に注目する。そうした異なる対象のはざまに「アーティスト」として生きていくすべや葛藤と共にオラインカの作品にアプローチし、支配的な言説としてのアートとつくり手の実践としての「アート」の関わりに着目した考察をおこなう。